

表情解析に基づく SOLO 感情指数は 重度認知症高齢者の睡眠の質を反映する

新田 博之, 堀田 翔一, 住吉 孝平,
本村 華那, 川崎 洋平

表情解析に基づく SOLO 感情指数は 重度認知症高齢者の睡眠の質を反映する

新田 博之*¹, 堀田 翔一², 住吉 孝平³,
本村 華那², 川崎 洋平⁴

要旨: 感情は睡眠の質 (Quality of Sleep: QOS) に影響する。本研究では重度認知症高齢者の表情と QOS に着目し、表情解析による感情価と QOS との関連を検証した。認知症のある介護施設入居者 49 人の感情価を測定し、主な評価軸の Energy・Valence と QOS を構成する睡眠効率・睡眠時間・中途覚醒との関連を調査し、Well-being・Stress と QOS との関連を調べた。QOS はシート型体振動計 (眠り SCAN) を活用し、感情価は SOLO 社の感情指数を用いた。重度認知症高齢者の Energy・Valence は睡眠効率・睡眠時間に正の関連が認められ、中途覚醒に負の関連が示された。Well-being は睡眠効率に正の関連が認められ、中途覚醒に負の関連が示された。重度認知症高齢者の SOLO 感情指数は QOS 評価に有用であり、睡眠効率・中途覚醒は Well-being の検討に活用できることを示唆した。

Key Words: 感情指数, 睡眠効率, 中途覚醒, Quality of Sleep (QOS)

I. 緒 言

認知症は、日常生活に支障を来す慢性進行性の疾患であり、重症化に伴い運動や言語機能は低下し意思疎通が困難になる。認知症の重症度が高いほど、陽性の感情表出や表情変化が生活の質 (Quality of Life: QOL) を示す要素となる (松下 2007)。重度認知症高齢者の心理評価について矢野ら (2012) は、標準意欲評価法 (CAS) の中で面接法による意欲評価スケールを用いて表情と視

線を調査し、表情変化の評価は個人差が大きく、認知症の重症度で異なることを示している。また、表情と視線の評価は、無動、視力及び注意障害がある場合では、実際より低下する可能性について言及している。

一方 Ekman & Friesen (1978) は、表情の顔動作について、複数の部位に区分する表情測定法 (FACS) を用いると客観的に測定できることを示し、Russell (1980) は感情円環モデルを提唱し、横軸に快-不快を示す感情価 (Valence) をとり、縦軸に覚醒の強さ (Energy) をとった円環上に、すべての感情価は配置され可視化できることを示している。たとえば、覚醒した快の感情価は Happy に該当し、覚醒していない快の感情価は Relaxed に該当する。Happy・Delighted のような類似した感情価は近くに配置され、Relaxed・Annoyed のような類似しない感情価は遠くに配置される。

2024年4月23日受付 / 2024年9月10日受理
SHINDEN Hiroyuki*¹, HORITA Shoichi², SUMIYOSHI Kohei³, MOTOMURA Kana², KAWASAKI Yohei⁴

1 医療法人参天会

2 介護老人福祉施設喜入の里

3 きいれセントラルクリニック

4 埼玉医科大学大学院医学研究科生物統計学教室

* E-mail: nfa@kiire.jp

それぞれの感情価は円環上に示した方向と距離で示され、各感情価の方向差が感情の関係性を表す(濱ら 2005: 48-52)。肯定的な感情・否定的な感情と睡眠の質(Quality of Sleep: QOS)との関連について佐伯ら(2008)は、公務員827人を対象にして、QOSを主観的に評価するピッツバーグ睡眠質問票(Pittsburgh Sleep Quality Index: PSQI)を用いた3年間の追跡調査で検証し、QOSは感情に影響を及ぼすことを示している。Umeda-Kameyama et al. (2021)は、軽度認知症の判別について、軽度認知症のある121人と認知機能が正常な117人の中立的な表情をした顔画像を人工知能に学習させ、感度87.31%、特異度94.57%、正答率92.56%で認知症を判別したことを報告している。一方で、重度認知症高齢者の表情は個人差が大きく、認知症の重症度などにより評価は異なり(矢野ら 2012)、重度認知症高齢者の表情を客観的に検証した研究はみられない。感情とQOSとの関連は示されつつあるが(佐伯ら 2008)、重度認知症高齢者の感情価とQOSとの関連は明らかにされていない。

本研究では、重度認知症高齢者の表情解析による感情価とQOSに着目し、感情価とQOSとの関連を明らかにする。

II. 方 法

1. 対象者

A市にあるグループ企業が運営する事業所を対象とした。対象者は、介護老人福祉施設2箇所、介護老人保健施設1箇所、グループホーム1箇所、小規模多機能型居宅介護1箇所、住宅型有料老人ホーム3箇所の入居者とした。介入時の対象者61人から、認知症と鑑別診断がなされていない4人を除外し、介入が28週継続した49人を調査対象とした。さらに、新型コロナウイルスに罹患した1人の罹患期間、基礎疾患の悪化や急変により医療機関を受診した4人の回復までの期間、新型コロナのワクチン接種により副反応が生じた1人の副反応がみられた期間のデータを除外した。

2. A市の新型コロナウイルス感染者数と対象者の活動制限

A市保健所管内における週別の新型コロナウイルス感染者数は、12週までは100人を下回っていたが、13週を過ぎると増加し、15週目では2,000人を上回った。対象者の施設内活動は、全事業所で15週までは介入前の活動量が維持されたが、16週目からは感染リスクを高める人的接触を制限し、施設内の活動量は減少した。

3. 調査期間

2021年10月20日から2022年5月3日までを調査期間とした。

4. 倫理的配慮

対象者及び家族代諾者に、研究の趣旨・目的・研究方法・個人情報の保護について、参加は自由意志であり拒否による不利益はないこと、いつでも同意は撤回できることを文書と口頭で説明し書面での同意を得た。対象者データは匿名性の確保を図り、個人が特定できない処置を施した。なお、調査については、2021年9月29日かごしま福祉開発研究所における研究倫理審査委員会の承認(承認番号: 21-A9001)を得て実施した。

5. 調査及び評価項目

対象者の基本情報として、性別、年齢、身長、体重、BMI、要介護度、HDS-R、障害高齢者の日常生活自立度、認知症高齢者の日常生活自立度、BPSDの有無を調べた。睡眠状態は、シート型体振動計(Paramount Bed社製: 眠りSCAN、型番: NN-1310)を用いて、PSQIの評価項目になる睡眠効率、睡眠時間、中途覚醒を測定し、背景因子として活動量、睡眠潜時を測定した。QOSを評価する指標として、睡眠と判定した時間の割合を示す睡眠効率、睡眠と判定された総時間を示す睡眠時間を採用し、睡眠の困難性を示す指数として、睡眠中の覚醒と判定された総時間を示す中途覚醒を採用した。活動量、睡眠潜時については背景因子として関連性を調べた。

感情価は、表情解析に基づくSOLO感情指数 (Solo Wellbeing Ltd 製) を採用し、Energy・Valence・Well-being・Stressを測定した。SOLO感情指数は、感情の評価軸となるEnergy・Valenceを採用した。また、睡眠データの測定は、SOLO感情指数の測定日の12:00から翌11:59までとした。SOLO感情指数とQOSの評価指数は、週3回以上収集された週の平均値をそれぞれ求め、28週の平均値を用いてSOLO感情指数とQOS評価指数との関連を調べた。なお、対象者の基本情報、睡眠状態のデータ、SOLO感情指数のデータについては各施設の相談員が記述した。相談員は日頃の業務を通じて対象者の実状を把握している。

6. 認知症の判定と区分

認知症のスクリーニング検査はHDS-R、MMSEが普及している。HDS-Rは20点以下で高い判別性を示し、感度93%、特異度86%が認められる(加藤ら 1991)。一方MMSEは、判別基準の23点以下で感度81%、特異度89%が示されており(Tsoi et al. 2015)、どちらも高い妥当性が認められている。本稿では認知症の判別にHDS-Rを採用し、認知症の程度を奈良・内山編(2009:47)に基づき判定し、「21~30点」を異常なし、「16~20点」を軽度の認知症、「11~15点」を中度の認知症、「6~10点」をやや高度の認知症、「0~5点」を高度の認知症と判別した。本研究ではさらに認知症の程度を、軽度の認知症に中度の認知症をあわせて軽度・中度の認知症とし、やや高度の認知症、重度の認知症を加えた3区分とした。

7. SOLO感情指数

SOLO感情指数は、顔表情に無意識のうちに一瞬現れては消えるMicro Expressionsをタブレットなどの内蔵カメラを用いて測定し、Russellの感情円環モデルに基づき評定した感情価である。EnergyはRussellの感情円環モデルの縦軸になり感情の覚醒度を示す、Valenceは横軸になり感情の快-不快度を示す。Well-beingは感情の良好度を示し、Stressは感情の負荷度を示す感情価であ

る。Micro Expressionsは、抑制された感情がわずかに1/25秒ほど現れる微細な顔表情であり、本当の感情を示す性質がある(Zhao & Xu 2018)。

8. 眠りSCANの機能とQOS評価

客観的な睡眠測定は睡眠ポリグラフ(Polysomnography: PSG)がゴールドスタンダードであるが、頭に電極を装着するなど睡眠を阻害する。本研究では、身体と非接触で測定するシート型体振動計(眠りSCAN)を採用した。

眠りSCANは、マット下に設置することで、マット上の人の呼吸、心拍、体動などを対象者に負担を与えず連続して測定できる特徴がある。Kogure et al. (2011)は、睡眠の研究領域で広く使用されているアクチグラフと眠りSCANの精度を比較し、PSGとの一致率、感度及び特異度は、ほぼ同じであることを報告している。

睡眠効率率は、就床時刻から起床時刻までの睡眠判定時間の割合を示し、睡眠時間は睡眠と判定された総時間を示す。中途覚醒は睡眠の困難性を示す中途覚醒時間であり、最初の10分以上持続する睡眠判定区間の始まりから起床前の最後の睡眠判定までの覚醒判定された総時間を示す。活動量は活動量(体動量)の平均値を示し、睡眠潜時は就床時刻から最初に10分以上持続する睡眠判定区間の始まりまでの寝つきにかかった時間を示す。

9. 分析方法

SOLO感情指数(Energy・Valence・Well-being・Stress)と睡眠データ(睡眠効率率・睡眠時間・中途覚醒・活動量・睡眠潜時)との関連を一般化推定方程式(Generalized Estimating Equation: GEE)を用いて単変量解析及び多変量解析した。多変量解析では、要介護度・障害高齢者の日常生活自立度・認知症高齢者の日常生活自立度・介入時の年齢・性別・BMIを交絡要因とした。データ解析にはStata17/MP4(Stata Crop LCC, College Station, TX, USA)を用い、仮説検定での有意水準は両側5%とした。なお、探索的な解析であるため、多重性の調整は実行していない(Althouse 2016)。

Ⅲ. 結 果

1. 対象者の要介護度・認知症・身体的特徴・日常生活に関する測定値

表1に示すように、介入開始時における各項目の平均値及び標準偏差は、年齢は 85.6 ± 6.9 歳、身長 147.9 ± 8.1 cm、体重 46.1 ± 8.6 kg、BMI 21.1 ± 3.5 kg/m²であり、肥満度判定基準¹⁾における普通体重であった。性別でみると、男性4人(8.2%)、女性45人(91.8%)、年齢は男性 85.0 ± 2.5 歳、女性 85.6 ± 7.1 歳であり、男性に比べて女性のほうが多かった。身長は男性 165.0 ± 5.4 cm、女性 146.3 ± 6.3 cm、体重は男性 51.9 ± 7.6 kg、女性 45.3 ± 8.5 kgであった。厚生労働省(2019)の調査によると、80歳以上の高齢者の身長・体重の平均値及び標準偏差は、男性では、身長 161.1 ± 6.4 cm、体重は 60.1 ± 9.4 kg、女性では、身長 146.6 ± 6.2 cm、体重 48.6 ± 8.2 kgであった。男性の対象者は、身長では大きな違いはみられなかったが、体重では対象者のほうが13.6%軽かった。一方女性では、対象者と大きな違いはみられなかった。

要介護度は、要介護度4が16人(32.7%)で最も多く、要介護度1~2が14人(28.5%)、要介護

度3が10人(20.4%)、要介護度5が9人(18.4%)であった。HDS-Rで最多は、重度の認知症19人(38.8%)であり、次に多いのは、やや重度の認知症18人(36.7%)、3番目に多いのは、中度の認知症10人(20.4%)であった。やや重度・重度の認知症は合計で37人(75.5%)と多く、すべての対象者が認知症を有していた。障害高齢者の日常生活自立度は、寝たきりと判定されるC1・C2は、9人(18.3%)であり、ベッド上での生活が主体となるB1・B2は27人(55.1%)であった。認知症高齢者の日常生活自立度は、日常生活に支障があり行動や意志疎通が困難なⅢa・Ⅲb・Ⅳは35人(71.4%)であった。

7割を超える対象者は、中・重度の要介護状態(要介護3~5)であり、重度(重度及びやや重度)の認知症を有していた。障害高齢者の日常生活自立度でみると、7割を超える対象者が日中の生活がベッド上のみ、或は、ベッド上が主体になるB1・B2・C1・C2であり、2割ほどの対象者が、自力で寝返りができない、あるいは、自力で寝返りが困難なC1・C2であった。認知症高齢者の日常生活自立度でみると、7割を超える対象者が日常生活に支障を来していた。

表1 対象者の要介護度・認知症・身体的特徴・日常生活に関する測定値

要介護度	HDS-R		障害高齢者の日常生活自立度		認知症高齢者の日常生活自立度	
要介護1 3人(6.1%)	異常なし	30~21 0人(0.0%)	J1	0人(0.0%)	I	0人(0.0%)
要介護2 11人(22.4%)	軽度の認知症	20~16 2人(4.1%)	J2	1人(2.0%)	Ⅱa	4人(8.2%)
要介護3 10人(20.4%)	中度の認知症	15~11 10人(20.4%)	A1	6人(12.2%)	Ⅱb	10人(20.4%)
要介護4 16人(32.7%)	やや重度の認知症	10~6 18人(36.7%)	A2	6人(12.2%)	Ⅲa	20人(40.8%)
要介護5 9人(18.4%)	重度の認知症	5~0 19人(38.8%)	B1	10人(20.4%)	Ⅲb	7人(14.3%)
			B2	17人(34.7%)	Ⅳ	8人(16.3%)
			C1	6人(12.2%)	M	0人(0.0%)
			C2	3人(6.1%)		

	年齢	身長	体重	BMI
全体	85.6歳±6.9歳	147.9 cm±8.1 cm	46.1 kg±8.6 kg	21.1 kg/m ² ±3.5 kg/m ²
男性 4人(8.2%)	85.0歳±2.5歳	165.0 cm±5.4 cm	51.9 kg±7.6 kg	
女性 45人(91.8%)	85.6歳±7.1歳	146.3 cm±6.3 cm	45.3 kg±8.5 kg	

N=49

注：各項目の割合は端数処理の関係で100%とならない場合がある。

2. 対象者の睡眠データに関する測定値

SOLO感情指数の平均値及び標準偏差は、Energy 0.65±0.16, Valence 0.55±0.23, Well-being 0.41±0.26, Stress 0.19±0.14であった。睡眠データの平均値及び標準偏差は、睡眠効率72.9±18.4%, 睡眠時間565.7±254.7分, 中途覚醒155.4±112.4分, 活動量79.20±50.80回/分, 睡眠潜時30.9±35.9分であった。健常高齢者の参考値は、睡眠効率75~98%, 睡眠潜時1~28分であり(野田・宮田 2017), 対象者の睡眠効率は健常高齢者の参考値をやや下回り、睡眠潜時は健常高齢者の参考値をやや上回った。

3. 認知症高齢者を対象としたSOLO感情指数と睡眠データとの検証

認知症高齢者を対象としたSOLO感情指数Energy・Valence・Well-being・Stressと睡眠効

率・睡眠時間・中途覚醒・活動量・睡眠潜時との関連を評価したGEEの結果を表2に示す。なお、rhoはクラスター内(同一対象者内)の相関係数を示す。

認知症高齢者では、単変量解析で有意な関連が示された説明変数と応答変数は、Energyでは睡眠効率・睡眠時間・中途覚醒・活動量に有意な関連が示され、Valenceは睡眠効率・睡眠時間・中途覚醒・活動量に有意な関連が示された。Well-beingは中途覚醒・活動量に有意な関連が示されたが、ほか説明変数と応答変数の組み合わせでは統計学的に有意な関連は示されなかった。

多変量解析で有意な関連が示された説明変数と応答変数は、Energyでは睡眠効率(偏回帰係数=7.140, 95%CI 3.194, 11.085, $p=0.000$, $\rho=0.776$)・睡眠時間(偏回帰係数=50.064, 95%CI 12.181, 87.946, $p=0.010$, $\rho=0.818$)・中途覚醒(偏回帰

表2 認知症高齢者を対象としたEnergy・Valence・Well-being・Stressと睡眠データとの関連

説明変数	応答変数	単変量モデル				多変量モデル			
		回帰係数	95%CI	p	ρ	偏回帰係数	95%CI	p	ρ
Energy	睡眠効率	6.859	2.934 10.784	0.001***	0.885	7.140	3.194 11.085	0.000***	0.776
	睡眠時間	47.921	14.351 81.491	0.005**	0.958	50.064	12.181 87.946	0.010**	0.818
	中途覚醒	-69.389	-102.397 -36.382	0.000***	0.769	-71.042	-103.886 -38.199	0.000***	0.632
	活動量	-17.129	-27.979 -6.279	0.002**	0.885	-17.509	-28.592 -6.427	0.002**	0.779
	睡眠潜時	4.829	-9.352 19.011	0.504	0.594	5.610	-8.622 19.842	0.440	0.473
Valence	睡眠効率	4.877	2.134 7.621	0.000***	0.888	5.254	2.486 8.022	0.000***	0.776
	睡眠時間	34.634	11.259 58.010	0.004**	0.959	38.165	11.561 64.769	0.005**	0.817
	中途覚醒	-38.821	-61.967 -15.676	0.001**	0.775	-41.020	-64.115 -17.925	0.000***	0.636
	活動量	-16.167	-23.731 -8.603	0.000***	0.889	-16.921	-24.680 -9.163	0.000***	0.779
	睡眠潜時	1.975	-7.989 11.940	0.698	0.593	1.185	-8.818 11.188	0.816	0.473
Well-being	睡眠効率	1.915	-0.427 4.257	0.109	0.886	2.183	-0.170 4.536	0.069	0.778
	睡眠時間	12.920	-7.117 32.958	0.206	0.957	15.917	-6.649 38.484	0.167	0.818
	中途覚醒	-27.367	-47.058 -7.676	0.006**	0.772	-28.958	-48.563 -9.353	0.004**	0.635
	活動量	-6.600	-13.071 -0.129	0.046*	0.886	-7.147	-13.752 -0.543	0.034*	0.779
	睡眠潜時	3.221	-5.241 11.684	0.456	0.594	2.917	-5.563 11.398	0.500	0.474
Stress	睡眠効率	-1.907	-4.779 0.966	0.193	0.887	-2.063	-4.955 0.829	0.162	0.782
	睡眠時間	-6.744	-31.314 17.826	0.591	0.957	-7.877	-35.571 19.818	0.577	0.821
	中途覚醒	4.884	-19.451 29.218	0.694	0.774	5.813	-18.496 30.123	0.639	0.642
	活動量	7.176	-0.759 15.112	0.076	0.887	7.551	-0.562 15.665	0.068	0.783
	睡眠潜時	2.736	-7.855 13.327	0.613	0.594	3.435	-7.197 14.067	0.527	0.472

N=49 * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

注：各項目の値は週平均値とした。

係数 = -71.042, 95%CI -103.886, -38.199, $p = 0.000$, $\rho = 0.632$)・活動量 (偏回帰係数 = -17.509, 95%CI -28.592, -6.427, $p = 0.002$, $\rho = 0.779$) に有意な関連が認められた。

Valenceは睡眠効率 (偏回帰係数 = 5.254, 95%CI 2.486, 8.022, $p = 0.000$, $\rho = 0.776$)・睡眠時間 (偏回帰係数 = 38.165, 95%CI 11.561, 64.769, $p = 0.005$, $\rho = 0.817$)・中途覚醒 (偏回帰係数 = -41.020, 95%CI -64.115, -17.925, $p = 0.000$, $\rho = 0.636$)・活動量 (偏回帰係数 = -16.921, 95%CI -24.680, -9.163, $p = 0.000$, $\rho = 0.779$) に有意な関連が認められた。

Well-beingは中途覚醒 (偏回帰係数 = -28.958, 95%CI -48.563, -9.353, $p = 0.004$, $\rho = 0.635$)・活動量 (偏回帰係数 = -7.147, 95%CI -13.752, -0.543, $p = 0.034$, $\rho = 0.779$) に有意な関連が認められたが、ほか説明変数と応答変数の組み合わせでは統計学的に有意な関連は示されなかった。

解析の結果、Energy・Valenceは睡眠時間・睡眠効率・中途覚醒に有意な関連が認められ、活動量はEnergy・Valence・Well-beingに有意な関連が認められた。

睡眠効率は、Energy (回帰係数 = 7.140, $p = 0.000$)・Valence (回帰係数 = 5.254, $p = 0.000$) に強い関連が認められた。Well-beingと睡眠効率とは有意な関連は示されなかったが、回帰係数 = 2.183, 95%CI -0.170, 4.536, $p = 0.069$, $\rho = 0.778$ をみると弱い関連が推測された。

Energyが「1」上がると、睡眠効率は「7.140」、睡眠時間は「50.064」上がる関連が示され、中途覚醒は「71.042」、活動量は「17.509」下がる関連が示された。Valenceが「1」上がると、睡眠効率は「5.254」、睡眠時間は「38.165」上がる関連が示され、中途覚醒は「41.020」、活動量は「16.921」下がる関連が示された。

Well-beingが「1」上がると、中途覚醒は「28.958」、活動量は「7.147」下がる関連が示された。

4. 認知症の程度で3区分した要介護度・認知症・日常生活に関する測定値

認知症の程度で3区分した要介護度・認知症及び障害高齢者の日常生活自立度を表3に示す。軽度・中度の認知症高齢者(12人)では、要介護度1は1人(8.3%)、要介護度2は5人(41.7%)、要介護度3は3人(25.0%)、要介護度4は3人(25.0%)であり、認知症高齢者の日常生活自立度Ⅱaは1人(8.3%)、Ⅱbは3人(25.0%)、Ⅲaは7人(58.3%)、Ⅲbは1人(8.3%)であった。障害高齢者の日常生活自立度A1は4人(33.3%)、A2は1人(8.3%)、B1は4人(33.3%)、B2は2人(16.7%)、C2は1人(8.3%)であり、BPSDのない人は6人(50.0%)、ある人は6人(50.0%)であった。

やや重度の認知症高齢者(18人)では、要介護度1は1人(5.6%)、要介護度2は5人(27.8%)、要介護度3は3人(16.7%)、要介護度4は7人(38.9%)、要介護度5は2人(11.1%)であり、認知症高齢者の日常生活自立度Ⅱaは1人(5.6%)、Ⅱbは6人(33.3%)、Ⅲaは7人(38.9%)、Ⅲbは3人(16.7%)、Ⅳは1人(5.6%)であった。障害高齢者の日常生活自立度J2は1人(5.6%)、A1は1人(5.6%)、A2は3人(16.7%)、B1は2人(11.1%)、B2は10人(55.6%)、C1は1人(5.6%)であり、BPSDのない人は15人(83.3%)、ある人は3人(16.7%)であった。

重度の認知症高齢者(19人)では、要介護度1は1人(5.3%)、要介護度2は1人(5.3%)、要介護度3は4人(21.1%)、要介護度4は6人(31.6%)、要介護度5は7人(36.8%)であり、認知症高齢者の日常生活自立度Ⅱaは2人(10.5%)、Ⅱbは1人(5.3%)、Ⅲaは6人(31.6%)、Ⅲbは3人(15.8%)、Ⅳは7人(36.8%)であった。障害高齢者の日常生活自立度A1は1人(5.3%)、A2は2人(10.5%)、B1は4人(21.1%)、B2は5人(26.3%)、C1は5人(26.3%)、C2は2人(10.5%)であり、BPSDのない人は13人(68.4%)、ある人は6人(31.6%)であった。

認知症の程度が重度になると要介護4・5の対象者数と割合は増加した。重度の認知症高齢者の多

表3 認知症の程度で3区分した要介護度・認知症及び障害高齢者の日常生活自立度

認知症の程度	人数	項目											
		要介護度			認知症高齢者の日常生活自立度			障害高齢者の日常生活自立度			BPSDの有無		
		ランク	人数	割合	ランク	人数	割合	ランク	人数	割合	ランク	人数	割合
軽度・中度の認知症	12	1	1	8.3%	I	0	0.0%	J1	0	0.0%	無	6	50.0%
		2	5	41.7%	II a	1	8.3%	J2	0	0.0%	有	6	50.0%
		3	3	25.0%	II b	3	25.0%	A1	4	33.3%			
		4	3	25.0%	III a	7	58.3%	A2	1	8.3%			
		5	0	0.0%	III b	1	8.3%	B1	4	33.3%			
					IV	0	0.0%	B2	2	16.7%			
					M	0	0.0%	C1	0	0.0%			
						C2	1	8.3%					
やや重度の認知症	18	1	1	5.6%	I	0	0.0%	J1	0	0%	無	15	83.3%
		2	5	27.8%	II a	1	5.6%	J2	1	5.6%	有	3	16.7%
		3	3	16.7%	II b	6	33.3%	A1	1	5.6%			
		4	7	38.9%	III a	7	38.9%	A2	3	16.7%			
		5	2	11.1%	III b	3	16.7%	B1	2	11.1%			
					IV	1	5.6%	B2	10	55.6%			
					M	0	0.0%	C1	1	5.6%			
						C2	0	0.0%					
重度の認知症	19	1	1	5.3%	I	0	0.0%	J1	0	0.0%	無	13	68.4%
		2	1	5.3%	II a	2	10.5%	J2	0	0.0%	有	6	31.6%
		3	4	21.1%	II b	1	5.3%	A1	1	5.3%			
		4	6	31.6%	III a	6	31.6%	A2	2	10.5%			
		5	7	36.8%	III b	3	15.8%	B1	4	21.1%			
					IV	7	36.8%	B2	5	26.3%			
					M	0	0.0%	C1	5	26.3%			
						C2	2	10.5%					

N=49

注：各項目の割合は端数処理の関係で100%とならない場合がある。

くは、認知症高齢者の日常生活自立度はⅢa・Ⅲb・Ⅳであり、障害高齢者の日常生活自立度はB1・B2・C1・C2であった。日常生活に支障を来し、日中はベッド上で過ごし介護を必要としていた。

5. 軽度・中度の認知症高齢者のSOLO感情指数と睡眠データとの検証

軽度・中度の認知症高齢者（20点 \geq HDS-R \geq 11点）のSOLO感情指数Energy・Valence・Well-being・Stressと睡眠効率・睡眠時間・中途覚醒・活動量・睡眠潜時との関連を表4に示す。なお、

rhoはクラスター内（同一対象者内）の相関係数を示す。

軽度・中度の認知症高齢者では、単変量解析で有意な関連が示された説明変数と応答変数は、Energyでは睡眠効率・睡眠時間・活動量に有意な関連が示され、Valenceは睡眠時間に有意な関連が示唆された。ほか説明変数と応答変数の組み合わせでは統計学的に有意な関連は示されなかった。

多変量解析では、解析上の計算が収束しなかった。そのため、参考値として結果を示す。多変量

表4 軽度・中度の認知症高齢者のEnergy・Valence・Well-being・Stressと睡眠データとの関連

説明変数	応答変数	単変量モデル				多変量モデル					
		回帰係数	95%CI	p	rho	偏回帰係数	95%CI	p	rho		
Energy	睡眠効率	13.979	4.340	23.617	0.004**	0.711	11.567	1.714	21.420	0.021*	-0.037
	睡眠時間	161.022	41.937	280.107	0.008**	0.713	140.829	58.460	223.198	0.001***	-0.037
	中途覚醒	-55.873	-134.147	22.401	0.162	0.643	-31.166	-111.665	49.334	0.448	-0.037
	活動量	-42.752	-67.284	-18.219	0.001***	0.784	-39.078	-63.727	-14.429	0.002**	-0.037
	睡眠潜時	-5.913	-28.698	16.872	0.611	0.522	-5.058	-30.475	20.359	0.697	-0.037
Valence	睡眠効率	5.234	-1.703	12.170	0.139	0.738	3.905	-3.048	10.858	0.271	-0.037
	睡眠時間	107.638	21.894	193.381	0.014*	0.716	96.533	38.753	154.312	0.001**	-0.037
	中途覚醒	12.053	-43.693	67.799	0.672	0.691	24.914	-31.491	81.319	0.387	-0.037
	活動量	-16.726	-34.392	0.941	0.064	0.797	-14.489	-31.967	2.989	0.104	-0.037
	睡眠潜時	-9.595	-26.086	6.896	0.254	0.520	-9.378	-27.165	8.409	0.301	-0.037
Well-being	睡眠効率	-1.211	-6.947	4.525	0.679	0.759	-2.257	-7.986	3.472	0.440	-0.037
	睡眠時間	30.150	-42.457	102.758	0.416	0.712	18.899	-29.461	67.260	0.444	-0.037
	中途覚醒	34.196	-11.306	79.698	0.141	0.711	43.259	-2.961	89.480	0.067	-0.037
	活動量	-0.860	-15.529	13.809	0.909	0.806	0.895	-13.554	15.344	0.903	-0.037
	睡眠潜時	2.626	-10.965	16.217	0.705	0.529	3.553	-11.107	18.214	0.635	-0.037
Stress	睡眠効率	-4.972	-11.002	1.059	0.106	0.753	-4.839	-10.750	1.071	0.109	-0.037
	睡眠時間	-34.372	-111.912	43.167	0.385	0.714	-34.383	-84.341	15.575	0.177	-0.037
	中途覚醒	26.556	-22.250	75.361	0.286	0.680	24.758	-23.277	72.793	0.312	-0.037
	活動量	15.219	-0.097	30.536	0.051	0.807	15.003	0.143	29.862	0.048*	-0.037
	睡眠潜時	8.210	-6.553	22.973	0.276	0.523	7.657	-7.500	22.814	0.322	-0.037

N=12 * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

注：各項目の値は週平均値とした。

解析で有意な関連が示された説明変数と応答変数は、Energyでは睡眠効率（偏回帰係数=11.567, 95%CI 1.714, 21.420, $p=0.021$, $\rho=-0.037$ ）・睡眠時間（偏回帰係数=140.829, 95%CI 58.460, 223.198, $p=0.001$, $\rho=-0.037$ ）・活動量（偏回帰係数=-39.078, 95%CI -63.727, -14.429, $p=0.002$, $\rho=-0.037$ ）に有意な関連が示唆された。

Valenceは睡眠時間（偏回帰係数=96.533, 95%CI 38.753, 154.312, $p=0.001$, $\rho=-0.037$ ）に有意な関連が示唆され、Stressは活動量（偏回帰係数=15.003, 95%CI 0.143, 29.862, $p=0.048$, $\rho=-0.037$ ）に有意な関連が示唆された。ほか説明変数と応答変数の組み合わせでは統計学的に有意な関連は示されなかった。

6. やや重度の認知症高齢者のSOLO感情指数と睡眠データとの検証

やや重度の認知症高齢者（10点 \geq HDS-R \geq 6点）のSOLO感情指数Energy・Valence・Well-being・Stressと睡眠効率・睡眠時間・中途覚醒・活動量・睡眠潜時との関連を表5に示す。なお、 ρ はクラスター内（同一対象者内）の相関係数を示す。

やや重度の認知症高齢者では、単変量解析で有意な関連が示された説明変数と応答変数は、Energyと有意な関連が示される応答変数はなかった。Valenceは中途覚醒・活動量に有意な関連が示されたが、ほか説明変数と応答変数の組み合わせでは統計学的に有意な関連は示されなかった。

多変量解析で有意な関連が示された説明変数と応答変数は、Energyと有意な関連が示される応答変数はなかった。Valenceは中途覚醒（偏回帰係数=-46.928, 95%CI -77.395, -16.461, $p=0.003$,

表5 やや重度の認知症高齢者のEnergy・Valence・Well-being・Stressと睡眠データとの関連

説明変数	応答変数	単変量モデル				多変量モデル					
		偏回帰係数	95%CI	p	rho	偏回帰係数	95%CI	p	rho		
Energy	睡眠効率	0.660	-5.341	6.660	0.829	0.867	1.729	-4.257	7.715	0.571	0.298
	睡眠時間	-39.043	-96.403	18.318	0.182	0.923	-30.015	-90.340	30.310	0.329	0.234
	中途覚醒	-28.255	-73.557	17.047	0.222	0.758	-40.128	-85.362	5.107	0.082	0.234
	活動量	-5.736	-20.970	9.497	0.460	0.850	-8.685	-23.519	6.149	0.251	0.276
	睡眠潜時	5.523	-7.034	18.080	0.389	0.354	-0.014	-13.762	13.734	0.998	0.058
Valence	睡眠効率	3.057	-1.039	7.154	0.144	0.869	3.809	-0.235	7.854	0.065	0.295
	睡眠時間	-23.136	-62.144	15.872	0.245	0.922	-17.106	-58.014	23.802	0.412	0.232
	中途覚醒	-39.196	-70.051	-8.340	0.013*	0.765	-46.928	-77.395	-16.461	0.003**	0.233
	活動量	-11.337	-21.733	-0.940	0.033*	0.853	-13.469	-23.465	-3.473	0.008**	0.274
	睡眠潜時	1.221	-7.531	9.972	0.785	0.358	-2.777	-12.101	6.547	0.559	0.056
Well-being	睡眠効率	0.854	-2.625	4.333	0.630	0.867	0.978	-2.476	4.432	0.579	0.302
	睡眠時間	-7.373	-40.741	25.996	0.665	0.923	-8.151	-43.018	26.716	0.647	0.228
	中途覚醒	-13.849	-40.134	12.437	0.302	0.758	-16.325	-42.455	9.805	0.221	0.245
	活動量	-5.283	-14.128	3.562	0.242	0.850	-5.762	-14.314	2.790	0.187	0.285
	睡眠潜時	0.717	-6.763	8.197	0.851	0.359	-0.601	-8.543	7.341	0.882	0.058
Stress	睡眠効率	1.824	-2.378	6.026	0.395	0.867	1.319	-2.831	5.469	0.533	0.304
	睡眠時間	13.976	-26.414	54.367	0.498	0.923	7.209	-34.667	49.085	0.736	0.232
	中途覚醒	-14.155	-46.119	17.810	0.385	0.756	-10.595	-42.024	20.834	0.509	0.245
	活動量	-4.025	-14.676	6.625	0.459	0.850	-2.695	-12.991	7.600	0.608	0.284
	睡眠潜時	-0.608	-10.286	9.069	0.902	0.360	1.922	-7.577	11.422	0.692	0.055

N=18 *p<.05, **p<.01, ***p<.001

注：各項目の値は過平均値とした。

rho=0.233)・活動量 (偏回帰係数=-13.469, 95%CI -23.465, -3.473, p=0.008, rho=0.274) に有意な関連が認められたが, ほか説明変数と応答変数の組み合わせでは統計学的に有意な関連は示されなかった。

7. 重度の認知症高齢者のSOLO感情指数と睡眠データとの検証

重度の認知症高齢者(5点≧HDS-R)のSOLO感情指数Energy・Valence・Well-being・Stressと睡眠効率・睡眠時間・中途覚醒・活動量・睡眠潜時との関連を表6に示す。なお, rhoはクラスター内(同一対象者内)の相関係数を示す。

重度の認知症高齢者のうちHDS-R=0点であったのは8人(42.1%)であった。単変量解析で有意な関連が示された説明変数と応答変数は, Energyでは睡眠効率・睡眠時間・中途覚醒に有意な関連

が示され, Valenceは睡眠効率・睡眠時間・中途覚醒・活動量に有意な関連が示された。Well-beingは睡眠効率・中途覚醒に有意な関連が示されたが, ほか説明変数と応答変数の組み合わせでは統計学的に有意な関連は示されなかった。

多変量解析で有意な関連が示された説明変数と応答変数は, Energyでは睡眠効率(偏回帰係数=8.168, 95%CI 2.126, 14.209, p=0.008, rho=0.718)・睡眠時間(偏回帰係数=61.972, 95%CI 0.789, 123.155, p=0.047, rho=0.717)・中途覚醒(偏回帰係数=-102.798, 95%CI -155.592, -50.004, p=0.000, rho=0.430)に有意な関連が認められたが, ほか説明変数と応答変数の組み合わせでは統計学的に有意な関連は示されなかった。

Valenceは睡眠効率(偏回帰係数=6.529, 95%CI 2.213, 10.846, p=0.003, rho=0.715)・睡眠時間(偏回帰係数=49.500, 95%CI 5.743, 93.256, p=0.027,

表6 重度認知症高齢者のEnergy・Valence・Well-being・Stressと睡眠データとの関連

説明変数	応答変数	単変量モデル					多変量モデル				
		回帰係数	95%CI		p	rho	偏回帰係数	95%CI		p	rho
Energy	睡眠効率	8.189	2.071	14.308	0.009**	0.909	8.168	2.126	14.209	0.008**	0.718
	睡眠時間	59.163	15.921	102.404	0.007**	0.979	61.972	0.789	123.155	0.047**	0.717
	中途覚醒	-104.319	-157.640	-50.997	0.000***	0.784	-102.798	-155.592	-50.004	0.000***	0.430
	活動量	-14.010	-32.652	4.631	0.141	0.895	-14.113	-33.155	4.929	0.146	0.682
	睡眠潜時	9.737	-18.955	38.430	0.506	0.596	8.081	-20.748	36.909	0.583	0.360
Valence	睡眠効率	6.291	1.940	10.643	0.005**	0.911	6.529	2.213	10.846	0.003**	0.715
	睡眠時間	46.279	15.920	76.638	0.003**	0.980	49.500	5.743	93.256	0.027**	0.717
	中途覚醒	-62.457	-100.533	-24.382	0.001**	0.794	-65.403	-103.171	-27.634	0.001***	0.424
	活動量	-19.523	-32.693	-6.353	0.004**	0.899	-20.399	-33.937	-6.861	0.003**	0.680
	睡眠潜時	8.044	-12.282	28.371	0.438	0.594	5.340	-15.192	25.873	0.610	0.360
Well-being	睡眠効率	4.274	0.516	8.033	0.026*	0.908	4.344	0.644	8.045	0.021*	0.714
	睡眠時間	22.535	-4.068	49.138	0.097	0.979	25.446	-12.046	62.938	0.183	0.716
	中途覚醒	-65.797	-98.291	-33.304	0.000***	0.787	-65.581	-97.502	-33.660	0.000***	0.425
	活動量	-10.329	-21.740	1.082	0.076	0.895	-10.700	-22.323	0.923	0.071	0.679
	睡眠潜時	5.798	-11.642	23.238	0.515	0.597	3.911	-13.478	21.300	0.659	0.361
Stress	睡眠効率	-2.823	-7.994	2.348	0.285	0.909	-3.096	-8.180	1.988	0.233	0.718
	睡眠時間	-4.240	-40.775	32.295	0.820	0.979	-6.196	-57.589	45.197	0.813	0.720
	中途覚醒	5.203	-40.293	50.698	0.823	0.788	9.246	-35.536	54.029	0.686	0.432
	活動量	10.625	-5.003	26.253	0.183	0.897	11.470	-4.468	27.407	0.158	0.683
	睡眠潜時	1.714	-22.320	25.749	0.889	0.595	3.907	-20.212	28.025	0.751	0.356

N=19 *p<.05, **p<.01, ***p<.001

注：各項目の値は週平均値とした。

rho=0.717)・中途覚醒(偏回帰係数=-65.403, 95%CI -103.171, -27.634, p=0.001, rho=0.424)・活動量(偏回帰係数=-20.399, 95%CI -33.937, -6.861, p=0.003, rho=0.680)に有意な関連が認められたが、ほか説明変数と応答変数の組み合わせでは統計学的に有意な関連は示されなかった。

Well-beingは睡眠効率(偏回帰係数=4.344, 95%CI 0.644, 8.045, p=0.021, rho=0.714)・中途覚醒(偏回帰係数=-65.581, 95%CI -97.502, -33.660, p=0.000, rho=0.425)に有意な関連が認められたが、ほか説明変数と応答変数の組み合わせでは統計学的に有意な関連は示されなかった。

Energyが「1」上がると、睡眠効率は「8.168」、睡眠時間は「61.972」上がる関連が示され、中途覚醒は「-102.798」下がる関連が示された。Valenceが「1」上がると、睡眠効率は「6.529」、睡眠時間は「49.500」上がる関連が示され、中途覚醒は

「65.403」、活動量は「20.399」下がる関連が示された。

Well-beingが「1」上がると、睡眠効率は「4.344」上がる関連が示され、中途覚醒は「65.581」下がる関連が示された。

IV. 考 察

1. 結果の解釈と説明

本研究では、認知症高齢者の感情価として表情解析に基づくSOLO感情指数Energy・Valence・Well-being・StressとQOSを構成する睡眠効率・睡眠時間・中途覚醒・活動量・睡眠潜時を用いて認知症高齢者の感情とQOSとの関連を反復横断的に検証した。重度認知症高齢者(HDS-R≤5点)において、Energy・Valenceは、睡眠効率・睡眠時間に正の関連を認め、中途覚醒に負の関連を示

した。Well-beingは、睡眠効率に正の関連を認め、中途覚醒に負の関連を示した。睡眠効率・中途覚醒はWell-beingの検討に活用できることを示唆した。これらの結果は、重度認知症高齢者における感情状態がQOSに強く関連していることを示した。特に、EnergyとValenceの指標が高い場合、睡眠効率が向上し、睡眠時間が延長される一方で、中途覚醒が減少することが明らかになった。これにより、日中の覚醒度や快適な感情状態を維持することが、夜間の良質な睡眠に寄与する重要な要因であることが示唆された。一方、StressとQOSとの間には有意な関連が認められなかった。これは、介護施設における環境がストレス管理に寄与している可能性がある。介護施設内では、対象者は一定の支援を受けて生活しており、個々のストレスレベルが低く抑えられていると考えられる。

本研究の結果から、重度認知症高齢者のQOS向上のためには、SOLO感情指数を用いた感情状態のモニタリングが有用であることが示された。特に、Energy及びValenceの指標がQOSに強く関連していることが確認され、これらの指標を用いることで、個別ケアの質を向上させるための具体的な手がかりが得られた。また、本研究は介護現場における実践的な応用可能性を示している。SOLO感情指数を用いた感情状態の評価は、非侵襲的かつ客観的な方法であり、介護施設での導入が容易である。この手法を用いることで、介護スタッフは高齢者の感情状態をリアルタイムに把握し、それに基づいた適切なケアを提供することができる。例えば、日中の活動やレクリエーションを通じてEnergyやValenceを高めることで、夜間の良質な睡眠を促進する戦略を立てることが可能である。さらに、重度認知症高齢者のQOS向上のための新しいアプローチを提供している。従来のQOS評価は主観的な評価に依存することが多かったが、本研究のように客観的なデータに基づく評価を導入することで、より正確かつ信頼性の高い評価が可能となる。このアプローチは、今後の研究や実践において、重度認知症高齢者のケア

の質を向上させるための基盤となるだろう。

また、政策立案者や介護施設管理者にとっても重要な示唆を提供している。高齢者のQOS向上は社会全体の福祉向上に直結する課題であり、本研究の成果を踏まえたケアプランや政策の見直しが求められる。感情状態の評価を標準的なケアプロセスに組み込むことで、全体的なケアの質が向上し、高齢者のQOLが改善されることが期待される。

以上のように、本研究は重度認知症高齢者の感情状態とQOSとの関連性を明らかにすることで、学術的な知見を提供するとともに、介護現場での実践的な応用可能性を示している。この成果は、重度認知症高齢者のQOS向上に寄与し、社会全体の福祉向上に貢献するものである。

2. 先行研究との比較

本研究は、重度認知症高齢者のSOLO感情指数とQOSとの関連性を明らかにしたが、これを理解するためにいくつかの先行研究を比較検討する。

新田ら(2023)の研究では、要介護高齢者及び認知症高齢者における表情解析による感情指数とQOSの関連性を分析している。この研究は、高齢者施設における高齢者を対象に、SOLOデジタルセラピーを用いた介入調査を実施し、感情指数がQOSに与える影響を示したものである。本研究と異なる点は、要介護高齢者及び軽度から中度の認知症高齢者を対象にしていることであり、重度認知症高齢者を対象とした本研究とは異なるアプローチを取っている。具体的には、認知症傾向のある高齢者を対象として認知症傾向のない高齢者3人(5.8%)が含まれていたが、本研究は認知症のある高齢者に絞って検証を行った。また、25回の介入調査ではEnergy・ValenceとQOSとの関連性は示されなかったが、28週になるとEnergy・Valenceと睡眠時間・睡眠効率との関連が示されることを示唆していた。さらに、表情解析に基づくSOLOデジタルセラピーの介入が睡眠効率に及ぼす影響は少なくとも17週以上の介入が必要で

あることを示唆し、評価は介入ごとではなく週の平均値で検証できることを示していた。一方、本研究でも28週間の縦断的データを使用しているが、QOSの評価項目を睡眠効率、睡眠時間、中途覚醒に加え、活動量や睡眠潜時との関連も検証している。睡眠の困難性を示す中途覚醒を含めることで、より深いQOSの評価が可能となった。

矢野ら(2012)の研究は、検者が個別に面接を行い評価するものであり、重度認知症高齢者の表情解析の有用性を示しているが、QOSとの関連については触れていない。佐伯ら(2008)の研究では、公務員を対象に、肯定的・否定的感情がQOSに及ぼす影響を3年間の追跡調査で検証し、肯定的感情がQOSを向上させ、否定的感情がQOSを低下させることを示している。これらの先行研究と比較して、本研究の新規性は重度認知症高齢者に焦点を当て、感情価とQOSとの関連を示した点にある。また、Energy・Valence・Well-being・Stressの各指標がQOSに与える影響を詳細に解析しており、特に睡眠効率・睡眠時間・中途覚醒に対する関連性を明らかにしている。さらに、本研究は28週間にわたるデータを用いて、感情価とQOSとの関連をより確実に示した点が先行研究と異なる。本研究の結果から、重度認知症高齢者における感情とQOSの関連性を新たに明らかにした。

V. 研究の限界及び今後の研究の方向性

本研究にはいくつかの限界が存在し、これらを考慮したうえで今後の研究の方向性を示す。

まず、対象者の選定に関する限界がある。本研究は特定の介護施設に入居している重度認知症高齢者を対象としているため、結果の一般化には慎重を要する。一般の家庭で生活する認知症高齢者や他の地域の介護施設における高齢者にも同様の結果が適用できるかは不明である。したがって、今後の研究では、より多様な対象者を含めた大規模な研究が必要である。

次に、サンプルサイズの制約がある。本研究は

49名の重度認知症高齢者を対象としており、サンプルサイズが比較的小さいため、結果の信頼性に影響を及ぼす可能性がある。特に、認知症の程度によってさらにサブグループに分けた場合、各グループのサンプルサイズがさらに小さくなる。今後の研究では、より多くの参加者を含めた大規模な調査を実施し、結果の一般化を図ることが重要である。

また、新型コロナウイルス感染症の影響も考慮する必要がある。本研究期間中において、対象者の活動が制限されていたことが結果に影響を与えた可能性がある。活動制限により、日中の活動量が減少し、これがQOSや感情状態に影響を及ぼしたと考えられる。今後の研究では、活動制限のない環境下でのデータ収集を行い、より正確な結果を得ることが求められる。

さらに、本研究ではSOLO感情指数を用いた感情状態の評価に焦点を当てているが、他の感情評価手法との比較検討は行っていない。SOLO感情指数が他の感情評価手法と比べてどの程度信頼性があり、QOSとの関連性をより正確に評価できるかを検討することが今後の課題である。また、感情状態の評価は表情解析に基づいているが、ほかの生理的指標や行動評価を組み合わせることで、より包括的な評価が可能となる。

最後に、研究デザインに関する限界として、因果関係の証明が困難である点が挙げられる。本研究は観察研究であり、感情状態とQOSとの関連性を示すものであるが、因果関係を明確に証明することはできない。また、本研究で得られた結果は、探索的な検討によるものであるため、この結果を確認するためには追加の検証的研究が必要である。今後の研究では、介入研究を実施し、感情状態を操作することでQOSにどのような影響があるかを検証することが重要である。

これらの限界を踏まえ、今後の研究では、より多様な対象者を含めた大規模な研究、活動制限のない環境下でのデータ収集、ほかの感情評価手法との比較検討、因果関係を検証する介入研究などが必要である。これにより、重度認知症高齢者の

QOS向上に向けたより実践的かつ信頼性の高い知見が得られることが期待される。

謝辞 本研究にご協力いただいた各事業所の皆さま、ならびに、ご協力を賜った関係各所に深く感謝する。

付記 本研究は、研究代表者である新田博之に加えて、4名の共同研究者、堀田翔一、住吉孝平、本村華那、川崎洋平により実施した。新田博之が研究全体を担当し、介護老人福祉施設2箇所、介護老人保健施設1箇所、グループホーム1箇所に関するデータ収集及びモニタリングは堀田翔一、本村華那が担当し、小規模多機能型居宅介護1箇所、住宅型有料老人ホーム3箇所に関するデータ収集及びモニタリングは住吉孝平が担当した。データの解析は、新田博之、川崎洋平が実施した。

利益相反 本研究に関して、特定の企業、組織、団体と関連する開示すべき利益相反はない。

注

- 1) 一般社団法人日本肥満学会が定めた肥満度判定基準である。肥満症専門医及び生活習慣病改善指導士の認定を行っている。

文 献

Althouse, A. D. (2016) Adjust for Multiple Comparisons? It's Not That Simple, *The Annals of Thoracic Surgery*, 101, 1644-5.

Ekman, P. and Friesen, W. V. (1978) *Facial Action Coding System: A Technique for the Measurement of Facial Movement*, Consulting Psychologists Press.

濱 治世・鈴木直人・濱 保久 (2005) 『感情心理学への招待, 感情・情緒へのアプローチ (初版第3刷)』サイエンス

社.

加藤伸司・下垣 光・小野寺敦志・ほか (1991) 「改訂長谷川式簡易知能評価スケール (HDS-R) の作成」『老年精神医学雑誌』2, 1339-47.

Kogure, T., Shirakawa, S., Shimokawa, M. et al. (2011) Automatic Sleep/Wake Scoring from Body Motion in Bed: Validation of a Newly Developed Sensor Placed under a Mattress, *Journal of Physiological Anthropology*, 30, 103-9.

厚生労働省 (2019) 『令和元年国民健康・栄養調査報告書, 第2部 体状況調査の結果』 (<https://www.mhlw.go.jp/content/000711007.pdf>, 2024.3.17).

松下 太 (2007) 「最重度認知症におけるQOLとは——感覚刺激療法を通して」『四條啜学園大学リハビリテーション学部紀要』3, 33-42.

奈良 勲・内山 靖編 (2009) 『図解心理学療法検査・測定ガイド 第2版』文光堂.

野田明子・宮田聖子 (2017) 「第3章睡眠検査」『医学検査——認知症予防のための検査特集』66, 95-105.

Russell, J. A. (1980) A Circumplex Model of Affect, *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 1161-78.

佐伯 謡・アリナセルモアツアリ・関根道和・ほか (2008) 「肯定的・否定的感情が睡眠の質に及ぼす影響——3年間の追跡調査より」『産業衛生学雑誌』50, 219-25.

新田博之・堀田翔一・本村華那・ほか (2023) 「要介護高齢者及び認知症高齢者の表情解析に基づく感情指数がQOSに及ぼす影響分析——SOLOデジタルセラピーの介入調査を通して」『福祉開発研究』6, 25-37.

Tsoi, K. K., Chan, J. Y., Hirai, H. W. et al. (2015) Cognitive Tests to Detect Dementia: A Systematic Review and Meta-analysis, *JAMA Internal Medicine*, 175, 1450-8.

Umeda-Kameyama, Y., Kameyama, M., Tanaka, T. et al. (2021) Screening of Alzheimer's Disease by Facial Complexion Using Artificial Intelligence, *Aging (Albany NY)*, 13, 1765-72.

矢野啓明・高橋伸佳・斯波純子・ほか (2012) 「重度認知症患者における視線と表情による簡易心理評価スケールの開発」『高次脳機能研究』32, 312-9.

Zhao, Y. and Xu, J. (2018) Necessary Morphological Patches Extraction for Automatic Micro-Expression Recognition, *Applied Sciences*, 8(10), 1811.

Application of the SOLO Emotion Index to Determine the Quality of Sleep in Elderly People with Severe Dementia

Hiroyuki SHINDEN, Shoichi HORITA, Kohei SUMIYOSHI,
Kana MOTOMURA, Yohei KAWASAKI

This study applied facial expression analysis to determine the quality of sleep (QOS) of elderly people with severe dementia. It also clarified the relationship between emotional values and the QOS by using the SOLO emotion index. We measured the emotional values of 49 nursing home residents with dementia by focusing on the relationship between energy, valence, sleep efficiency, sleep time, and trouble staying asleep, all of which comprise the main evaluation axis of the QOS. We also investigated the relationship between well-being, stress, and the QOS. In this case, a sheet-type body vibration meter (Nemuri SCAN) was used to measure the QOS, while the SOLO emotion index was used to determine emotional values. Among the sample of elderly people with severe dementia, both energy and valence showed a positive correlation between sleep efficiency and sleep time, but a negative correlation with difficulty staying asleep. Meanwhile, well-being had a positive association with sleep efficiency, but a negative association with difficulty staying asleep. The SOLO emotion index is useful for evaluating the QOS of elderly people with severe dementia. Moreover, sleep efficiency and difficulty staying asleep can be used to consider their level of well-being.

Key Words : SOLO emotion index, Sleep efficiency, Difficulty staying asleep, Quality of sleep